

# 茨城大学学報

第328号

平成28年8月～平成28年9月



五浦岬公園から臨む六角堂（五浦美術文化研究所）

## INDEX

- ◆ 【いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム】  
茨城全県にひろがる13高等教育機関のネットワークが誕生
- ◆ 「水戸黄門まつり」11年目の参加で初の入賞果たす
- ◆ 国立天文台との協力で高校生向け太陽講座
- ◆ 関東・東北豪雨で被災した民間の歴史史料の集中洗浄作業スタート
- ◆ 日立オートモティブシステムズと自動運転関連の共同研究を進める包括連携
- ◆ 工学部と茨城県建設コンサルタンツ協会が連携協定調印
- ◆ 岡倉天心に因んだ「五浦コーヒー」を開発
- ◆ 国内外の研究者招き岡倉天心シンポジウム
- ◆ 岡倉天心の思想と足跡に触れる「北茨城市 五浦探訪」
- ◆ 大学院生国際会議挑戦プロジェクトがスタート 目録の贈呈式と懇談会を実施
- ◆ 赤池誠章参議院議員が訪問
- ◆ 科研費採択件数向上を目指し今年度2回目の学内説明会を開催
- ◆ 平成28年度 学位記授与式を実施
- ◆ 第一回高大接続協議会を開催 高等学校関係者らと意見交換
- ◆ 【いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム】  
茨城の魅力度向上考える学生共同ワークショップ
- ◆ 茨苑会館食堂リニューアルオープンセレモニーを開催

茨城大学広報室

TEL 029-228-8008

FAX 029-228-8019

◆ 【いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム】  
茨城全県にひろがる 13 高等教育機関のネットワークが誕生

茨城県内の高等教育機関でつくる「いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム」（会長：三村 信男 学長）は、発足時の参加校である本学、茨城キリスト教大学、茨城工業高等専門学校、常磐大学の 4 校に加え、このたび県南地域等の大学を含む 9 つの大学が新たに参加することが決まり、県内全域に広がる高等教育機関 13 校のネットワークが誕生することになりました。新しい参加校の加盟は、8 月 3 日（水）に本学水戸キャンパスで行われた同コンソーシアム運営協議会で正式に決定され、その後、各校の代表者が出席して記者発表会が行われました。

今回コンソーシアムに新たに加わったのは、茨城県立医療大学、茨城女子短期大学、筑波大学、筑波学院大学、筑波技術大学、つくば国際大学、日本ウェルネススポーツ大学、放送大学（茨城学習センター）、流通経済大学の 9 校です。同コンソーシアムにおいては、これまで県北・県央地域における地域振興事業や人材育成に向けた取り組みを行ってきましたが、今後はその活動を全県に拡大するとともに、各校の特徴や強みを相互に共有することで、茨城県内への進学や雇用促進、人材育成、地域活性化に向けた協働の取り組みを推進していきます。

記者発表会では、各校の代表者が一同に並び、コンソーシアムとしての活動への意気込みをひとりずつ語りました。また、会長を務める三村 信男 学長が、全県規模の大学・高専ネットワーク構築のねらいと、今後の取り組みの計画を紹介するとともに、これまで同コンソーシアムとしての活動を行ってきた本学・常磐大学の学生 6 名も出席し、活動の振り返りと展望について話しました。



## ◆ 「水戸黄門まつり」11年目の参加で初の入賞果たす

8月6日（土）、水戸市で開催された「第56回水戸黄門まつり・市民カーニバル in MITO」に参加しました。

「水戸黄門まつり」は昭和36年から続く水戸市の祭りで、期間中は山車巡業や花大会等様々なイベントが開かれ、本学はこのうちの「市民カーニバル in MITO」に毎年参加しており、今年で11年目となります。今年は学生や教職員など約100名が参加し、学内のよさこいサークル“海砂輝（みさき）”が考案した振り付けで舞いながら、本学が管理する岡倉天心の遺蹟・六角堂を模した櫓とともに、大通りを練り歩きました。当日は三村信男学長も法被姿で駆け付け、参加者らは「黄門ばやし」「ごきげん水戸さん」の2曲を踊りながら大通りを行進しました。炎天下の中、約4時間にわたるパフォーマンスは日没まで続き、沿道からは大きな歓声と拍手が送られ、まちは熱気に包まれていました。

最後には審査結果が発表され、本学のチームは10位に輝き、11年目にして初の入賞を果たしました。カーニバル終了後に開かれた懇親会では学生と教職員がにぎやかに歓談し、互いの努力をねぎらいました。



留学生たちも多く参加



日没まで踊り続けた

## ◆ 国立天文台との協力で高校生向け太陽講座

8月23日（火）、「ひらめき☆ときめきサイエンス」の一環で、太陽について学ぶ講座を高校生向けに開講しました。

今年度は、科研費の研究の成果を小学生～高校生向けに知ってもらうプログラムである「ひらめき☆ときめきサイエンス」の講座を計4講座開催。この日行われたのは、太陽物理学が専門の野澤 恵 理学部准教授が講師を務める「手作り望遠鏡とプリズムで太陽からの光を虹に分けてみよう」というテーマの講座で、県内外から参加した12人の高校生たちが、講義と実習を通して半日間じっくり太陽について学びました。

午前中はTA（ティーチングアシスタント）を務める学部生・大学院生の説明を受けながら、1人ずつ手づくりの望遠鏡を組み立てていきました。分光器の仕組みなどについて学んだ高校生たちは、班内で互いに教えあいながら望遠鏡を完成させました。これらは各自持ち帰って、太陽光の観察に利用できるということです。

午後は国立天文台の職員が本学に来訪し、国立天文台の特別な装置を使ったプロジェクションマッピングによる太陽のデモンストレーションが行われました。高校生たちは、暗い部屋の中で球体に映し出された黒点や日食の様子などを見ながら、立体的に太陽の動きを理解しました。

参加した高校生は、「もともと宇宙に興味があって、講座に参加しました。プロジェクションマッピングが印象的でした」と笑顔で話していました。講座終了後、高校生1人1人に野澤准教授から「未来博士号」が授与されました。



プロジェクションマッピングで表現した太陽を囲んで記念撮影



グループごとに協力しながら望遠鏡を完成させる



野澤准教授から未来博士号が授与された

## ◆ 関東・東北豪雨で被災した民間の歴史史料の集中洗浄作業スタート

8月24日（水）と25日（木）の2日間、昨年の関東・東北豪雨で被災した歴史史料の集中洗浄・整理作業が行われました。

昨年（2015年）9月10日に発生し、常総市などで大きな被害をもたらした関東・東北豪雨に際して、本学では「茨城大学 平成27年関東・東北豪雨調査団」を結成し、さまざまな分野のグループを組織して支援・調査活動を行ってきました。そのうち、おもに人文学部の歴史・文化遺産コースの教員らで組織する「史料レスキューグループ」では、常総市教育委員会やボランティア団体の茨城史料ネットと協力して、災害発生直後から常総市内の文化遺産の被災状況を調査し、約1,000点の民間の古文書・書画を救出しました。これらの史料の中には、被害の大きかった地区の成り立ちを記した古文書のほか、現在の常総市出身の画家・猪瀬 東寧（1838～1908）や政治家・風見 章（1886～1961）に関する貴重な絵画・書簡等も確認されており、今後の調査・研究によって、地域の防災・減災や復興に活かされることが期待されます。

救出した歴史史料の多くは、吸水やカビの発生などによる損傷が激しかったため、大型の専用設備をもつ東北大学災害科学国際研究所に移送し、真空凍結乾燥処理を進めてきたが、このほど作業が完了し、8月までにほぼすべての史料が水戸キャンパスに戻されました。今回の集中洗浄・整理作業には、のべ50人以上のボランティアが集まり、史料の解体、撮影、蒸留水を用いた洗浄、吸水紙を使った乾燥などの工程を丁寧に進めていきました。作業と調査は今後も定期的に続けられる予定で、茨城史料ネットの代表も務める人文学部の高橋 修 教授は、「整理と調査をしっかりと進め、1年後ぐらいには何らかの形で公開したい」と展望を語っています。



刷毛を使って史料を洗浄する様子



既に作業を終えていた一部史料を紹介しながら  
報道機関に概要を説明

## ◆ 日立オートモティブシステムズと自動運転関連の共同研究を進める包括連携

8月8日（月）、自動車部品やシステムの開発、販売事業を行っている日立オートモティブシステムズ株式会社と、相互の発展や地域の発展と産業の振興に寄与することを目的に、「連携事業実施協定」を締結しました。8月31日（水）には都内で記者会見を行いました。今後、自動車の自動運転関連技術をはじめとした共同研究や学術交流、人的交流やグローバル規模でのインターンシップの受け入れ、人材育成などを推進していくことにより、次世代ビークルに向けた新技術の創出や産業競争力の向上による茨城県の地域創生にも貢献していきます。

両者は、これまでも基礎技術に関する共同研究を行ってきましたが、今後はこの協定を通じてさらに連携を拡大し、自動運転関連技術における応用技術などにおよぶ広範囲な共同研究を行います。今年度は、自動運転の主要技術となる周辺認識技術において、ミリ波レーダーやカメラなどの車載用センサーに関する共同研究を実施しました。それにあわせ、本学では、大学の重点研究として「次世代モビリティ基盤技術研究プロジェクト」を立ち上げました。今後、社会的機能も含めた基盤技術の研究を進めていきます。

さらに、次世代ビークル産業を支える人材の育成面でも連携を強化します。本学から日立オートモティブシステムズへのインターンシップについて、受け入れ現場を海外にも拡充することで、グローバルに活躍できる人材の育成を両者で進めるほか、大学における講座の共同開講や講師派遣、社会人博士課程学生の受け入れの加速化などを進めていく予定です。



連携事業実施協定調印式にて。

（左：茨城大学 三村信男 学長、  
右：日立オートモティブシステムズ株式会社 社長執行役員・CEO 関 秀明 氏）



商店街をアピールする風鈴・うちわ作りのワークショップ共同研究について記者会見で説明する梅比良 正弘 工学部教授

## ◆ 工学部と茨城県建設コンサルタンツ協会が連携協定調印

8月31日(水)、本学工学部と茨城県建設コンサルタンツ協会は、活力と個性に満ちた地域社会の形成や発展に寄与することを目的とした連携協定を締結しました。

両者は、社会人マスターの受け入れ、インターンシップの派遣などで、地域社会で活躍する人材の育成・確保、共同事業の企画運営など様々な分野で連携を図り、地域の活性化に貢献していくこととしています。

同協会は若者の人材不足などの課題を抱えており、本学工学部では土木建築技術の進歩により、過去に習得した技術や基準が陳腐化したため社会人の学び直しの必要性を認識しています。両者はこれまでも意見交換などを行ってききましたが、協定として明文化することで、より連携を深め、地域の課題に迅速且つ適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成発展に寄与していきたいという考えのもと協定締結に至りました。

既に昨年度からは協会会員が都市システム工学専攻で防災関係の研究を行っており、通常業務との両立を図りながら、社会人マスタープログラムなどで効率よく学習できるシステムを構築しています。

同日、本学工学部で協定調印式が行われ、馬場 充 工学部長は、「相互の人的・物的・学術的資源を活用することと、学生のインターンシップや社会人マスタープログラムでの人材交流によって、高度技術者を送り出していきたい」とあいさつしました。

今後、学生を含めた共同研究や講習会をはじめ、子ども向けの啓発活動、見学会などを計画しており、茨城県建設コンサルタンツ協会の橋本義隆会長は「人材確保が大きな課題で、魅力ある協会にしていくことが大事。今回の協定締結は魅力向上の一つにつながる。建設コンサルタント業務の楽しさや魅力を若い人に伝えていきたい」と意気込みを語りました。



## ◆ 岡倉天心に因んだ「五浦コーヒー」を開発

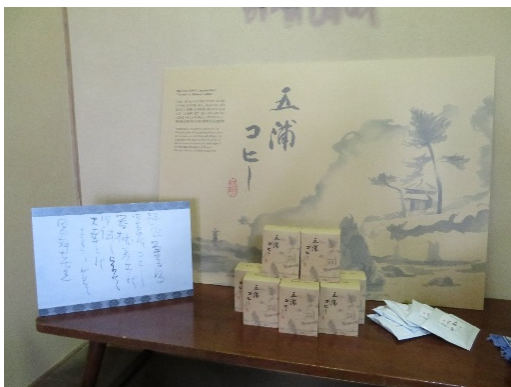
9月3日（土）、株式会社サザコーヒーと共同開発した新商品「五浦コーヒー」を発売しました。

この商品は、岡倉天心ゆかりの北茨城市・五浦地域のブランディング事業の一環として、「茨城大学 国際 岡倉天心シンポジウム 2016」にあわせて開発したものです。本学では、岡倉天心の著作『茶の本（THE BOOK OF TEA）』で示された「Teaism」について、異なる文化の人間同士をつなぐコミュニケーションメディアとして「茶」を位置づけているものと考え、そのような天心の思想を体現できるような商品として、コーヒーに注目しました。その後、本学のパートナー企業である株式会社サザコーヒー（本社：茨城県ひたちなか市）の鈴木 誉志男 会長が、天心がボストン美術館に勤めた 20 世紀初頭の米国の流通状況などを調査し、ブラジル、コロンビアのブレンドによる浅煎りのシティ・ロースト・コーヒーを再現させ、新たな商品としての開発を共同で進めてきました。

商品名である「五浦コーヒー」は、天心がコーヒーの道具を友人に贈る際に書いた書簡に見られる、「コーヒー器械」という記述から名づけました。六角堂を描いた水墨画をあしらったパッケージは、筑波大学芸術系の原 忠信 研究室がデザインを手がけ、「五浦コーヒー」の文字は書家で本学名誉教授の川又南岳氏が揮毫しました。また、本学の学生たちによる「五浦発信プロジェクト」では、「五浦コーヒー」の開発を契機とし、今後さらに岡倉天心についての学びを深めるとともに、地域住民と意見交換しながらおもてなしプラン作りをはじめとするまちづくり活動に取り組んでいきます。

開発をコーディネートした本学工学部の一ノ瀬 彩 助教は、「岡倉天心についての研究の積み重ねや、地域との交流をベースにし、さらに学生たちの活動を通してまちづくりにつなげていくという、大学ならではの商品ができた」と語っています。

商品は、カップオン形式のコーヒーが5パック入って、税込 800 円。「国際 岡倉天心シンポジウム 2016」の会場で試飲を提供したところ、参加者からは「飲みやすい」と好評でした。今後、北茨城市内の観光地や水戸キャンパス内にあるサザコーヒーの店舗などで順次販売を展開します。また、売り上げの一部は、岡倉天心遺跡の保全や教育普及・研究活動に役立てていくことになっています。



「五浦コーヒー」



五浦で行われた関係者・報道向け商品発表会の様子



## ◆ 国内外の研究者招き岡倉天心シンポジウム

9月3日（土）、国内外の研究者等を招き、「国際 岡倉天心シンポジウム 2016」（共催：茨城新聞社・北茨城市）を水戸市内のホテルで開催し、全国各地から約360人が参加しました。

思想家・岡倉天心は晩年の10年間、北茨城の五浦海岸に拠点を移し、横山大観らの画家とともに活動しました。岡倉が設計した六角堂（東日本大震災の津波で流失したあと再建）や当時の邸宅などの史跡は、昭和30年に本学に寄進され、本学五浦美術文化研究所を拠点に管理と調査・研究を行っています。

シンポジウムでは、国内からは、岡倉らが創設した日本美術院の代表理事で茨城県出身の日本画家・那波多目 功一 氏、前文化庁長官の青柳 正規 氏をゲストに迎えました。青柳氏は、文化財保護における岡倉の功績を振り返り、現在の日本の文化行政への影響に言及しました。また、海外からの登壇者として、岡倉が勤務した米国ボストン美術館で日本美術課長を務めているアン・シニムラ・モース氏、日本ヴェーダーンタ協会会長で僧侶のスワミー・メーダサーナンダ氏、マサチューセッツ州立大学准教授のヴィクトリア・ウェストン氏が、それぞれ岡倉の米国やインドといった海外での業績や文化交流の足跡を紹介しました。

国内外からのゲスト登壇者に、本学の岡倉天心研究者である小泉 晋弥 教授、清水 恵美子 准教授を加えた後半のパネルディスカッションでは、五浦美術文化研究所長を務める藤原 貞朗 教授の進行のもと、「岡倉がこれだけの文化交流を果たせたのはなぜか」「晩年の10年間における五浦とボストンのふたつの拠点の関係」という2つの課題について討議が行われました。議論を通じて、文化の力を信じ、行動した岡倉の姿が浮かび上がるとともに、これまで不遇の時代とも評されてきた五浦での10年間を、むしろ岡倉の文化・芸術活動の集大成として見る視座が示されました。

最後に閉会の挨拶を行った本学の影山 俊男 理事・社会連携センター長は、「今後、天心遺跡を管理する本学が天心研究のひとつの拠点になり、『五浦の10年』について再評価、発信するとともに、地域の皆さまや全国各地の天心ゆかりの方々とさらなる連携を図っていきたい」と語りました。



パネルディスカッションの様子



前文化庁長官・青柳 正規氏による記念講演

## ◆ 岡倉天心の思想と足跡に触れる「北茨城市 五浦探訪」

9月4日（日）、「国際 岡倉天心シンポジウム 2016」の一環として、茨城県北茨城市の六角堂など岡倉天心ゆかりの史跡などを巡るツアーイベント「北茨城市 五浦探訪」を開催しました。当日は県内外からの約100人の参加者が一日かけてツアーを楽しみました。

冒頭のガイダンスで北茨城市の豊田 稔 社長は、秋に実施される「茨城県北芸術祭」にも言及し、「北茨城で芸術が展開されるという天心の夢を果たしたい。今回の五浦探訪もあわせてこの秋は天心一色にできれば」と期待を込めて語りました。

参加者は4つのグループに分かれ、北茨城市の観光ボランティアの協力のもと、茨城大学五浦美術文化研究所、茨城県天心記念五浦美術館、五浦岬公園などのスポットを回りました。五浦美術文化研究所内の旧天心邸で開いた「珈琲茶席」では、席主を務めた株式会社サザコーヒーの鈴木 誉志男 会長が、天心が滞在した20世紀初頭の米国の流通状況の記録などをもとに自ら調合、焙煎したコーヒーを振る舞いながら、天心への思いを語りました。参加者たちは浅煎りのコーヒーを味わいながら、『茶の本 (The Book of Tea)』を著し、東洋と西洋の文化交流に奔走した天心に、思いを巡らせました。

午後は「ハイライト公演」として、五浦観光ホテル内に特設した舞台上、「天心オペラ《白狐》」を鑑賞しました。天心が最晩年に書いたオペラ「白狐 (The White Fox)」は、



北茨城市・五浦の各所をめぐるツアー

天心の生前には作曲されることがなく、「幻のオペラ」とされてきました。今回上演したのは、指揮者・作曲家の平井 秀明 氏が作曲および翻訳・台本の再構成を行ったもので、当日は平井氏の指揮と本学の清水 恵美子 准教授による解説のもと、約2時間にわたる上演が行われました。当日は、かつて天心が「天下の絶勝」と愛でた新潟県妙高市からも合唱団が来県し、その迫力ある歌声と悲哀に満ちた物語に、ツアー参加者たちも感動を覚えた様子でした。



旧天心邸で行われた珈琲茶席



ハイライト公演「天心オペラ《白狐》」

## ◆ 大学院生国際会議挑戦プロジェクトがスタート 目録の贈呈式と懇談会を実施

本学では、今年度より「茨城大学大学院生国際会議挑戦プロジェクト」（国際会議発表支援）を創設し、海外で開催される国際会議やシンポジウム、学会で口頭発表やポスター発表を行う大学院生に対して、旅費の一部や学会の参加登録費の支援を行う事業を始めました。

この制度は、グローバル化に向けた本学の方針の基づき、国際的な視野をもった人材の育成のため、海外の国際会議や学会における研究発表に挑戦する学生の経済的負担を軽減し、サポートすることを目的にスタートしたものです。学内での公募を行った結果、今年は約40人の学生がこの制度を利用することになりました。

9月14日（水）には、既にこの制度を利用して海外での研究発表を終えた8人の学生が集まり、三村信男学長から目録を受け取るとともに、懇談を行いながらそれぞれの経験を振り返りました。

代表して目録を受け取った教育学研究科の関口貴之さんは、キューバで開催された国際会議で発表しました。「ポスターの前に立っていると何人もの人たちが見に来てくれて、質問された。やりとりは円滑にいかない場面もあったが、日本では得られない新鮮な視点の質問もあって勉強になった」と振り返りました。また、米国のシンポジウムで口頭発表を行った理工学研究科の今井智博さんは、前夜は緊張して眠れなかったことを明かしつつも、「発表は理解してもらえて、質問も多くもらった」と、手ごたえがあったことを報告しました。

三村学長は、30代になって初めて海外での研究発表を行ったという自身の経験を紹介した上で、「20代前半という若いうちに海外へ行って発表するというのはすばらしいことだし、良い経験になったと思う。こういう制度ができたので、ぜひ後輩たちにも海外での発表を勧めてもらえれば」と語りました。



三村学長から目録を受け取る大学院生



懇談会出席者全員で集合写真



懇談会の様子

## ◆ 赤池 誠章 参議院議員が来訪

参議院の赤池 誠章 議員が、9月14日（水）に本学を訪問し、本学の特色ある授業や研究等を視察しました。

最初に、三村 信男 学長が本学の現状や産学連携、COC 事業及び COC プラス事業に関する取組みを含めた概要を説明し、大学執行部と活発な意見交換が行われました。

その後、理学部の量子物性合成評価第1実験室では、伊賀 文俊 教授の研究室の大学院生が、最近導入したという超高压プレス装置を紹介しながら、超高压環境における新しい機能性物質の希土類金属化合物合成の研究開発について説明しました。

続いて、図書館のグループ学習室で行われていた学生のプロジェクトのミーティングに、赤池議員がゲストとして参加しました。このミーティングは、学生が地域と連携しながらさまざまな企画を提案・実行する「学生地域参画プロジェクト」のうち、学生食堂を地域の新たな拠点としてリニューアルしようと取り組んでいるグループと、近隣の農家の協力のもと農作物の生産・活用を進めているグループとの協働を検討するものです。赤池議員は、各グループの説明を聞いた上で、プロジェクトの内容や始めた動機などを質問し、さまざまな切り口から意見交換が行われました。

次に、本学の教員や学生が中心となり活動を行っている「茨城史料ネット」代表の人文学部・高橋 修 教授から、昨年の関東・東北豪雨で被災した民間の古文書の救済・保存活動について説明があり、当日実施されていた被災史料の集中洗浄・修復作業を見学しました。

最後に、長谷川 順子 学術情報課長が図書館内を案内し、地震で書籍が落下しにくい書棚や学生が自由に利用できるラーニングcommons等の施設を紹介しました。



学生たちのミーティングに参加した  
赤池議員（左）



全国各地の地方紙が読める図書館の  
「新聞マルシェ」を見学

## ◆ 科研費採択件数向上を目指し今年度2回目の学内説明会を開催

本学の教職員を対象とした「平成28年度 第2回 科研費学内説明会」を水戸キャンパスで9月21日（水）に開催しました。この説明会は科研費制度に関する意識向上、応募件数の拡大と採択率の向上を目的として毎年開催しているもので、5月から6月にかけて開催されて好評だった「第1回 科研費学内説明会」に次いで、今年度2回目の開催となります。

説明会の様子はバーチャルキャンパスシステム（VCS）により日立・阿見の2キャンパスに同時配信され、あわせて約200名の教職員が参加しました。

説明会では、三村 信男 学長の挨拶につづき、鈴木 義人 学長特別補佐（研究戦略担当）から本学における科研費採択状況および支援制度について説明がありました。

その後、研究協力係長から本年度の公募要領の主な変更点について説明のうえ、科研費審査員の経験者および採択実績の高い教員を講師に迎え、審査の状況や科研費獲得のポイントについての講演が行われました。

各講師からは科研費獲得に向けての普段からの取組や申請書作成時のポイントなど、採択の実例や審査員としての視点を交えて説明されました。参加者からは「新しい視点の提供があり非常に参考になった。」「ぜひ今年度の応募から活用したい。」などの声が寄せられ、直前に迫った科研費応募に向けて大きな後押しとなりました。



説明会の様子

## ◆ 平成 28 年度 学位記授与式を実施

9月27日（火）、平成28年度 茨城大学 学位記授与式が挙行政され、課程博士7名、課程修士5名、課程学士17名の計29名に学位記が授与されました。

授与式には卒業生の家族なども訪れ、ひとりひとりが三村信男学長から学位記を手渡される姿を見守っていました。卒業生のうち6名が留学生で、日本での勉学の日々を噛みしめている様子でした。

学位授与式で三村学長は、「今日がゴールではなく新しい出発となる。これからは変化が激しく複雑な時代だが、新しく活躍する場所において、課題に直面してもひるまず、また世界の問題を傍観することなく取り組んでほしい」と告辞を述べました。



学士課程卒業生



修士課程卒業生



博士課程卒業生

## ◆ 第一回高大接続協議会を開催 高等学校関係者らと意見交換

9月28日（水）、第一回高大接続協議会を開催しました。

この協議会は、高等学校教育、大学教育及び大学入学者選抜の一体的な改革の流れを踏まえ、高等学校関係者との意見交換を密にしながら高大接続改革の推進を図ることを目的に実施しています。学外からは茨城県教育庁の高校教育課の担当者及び県立、私立の高等学校長らを招き、学内からは泉岡 明 副学長（入試・高大接続）・アドミッションセンター長、木村 競 副学長（教育改革）・全学教育機構長ほか、各学部から代表の教員が出席しました。

第一回の開催にあたっては三村 信男 学長も参加し、冒頭で「大学の入試と教育の問題を大学だけで考えては不十分。高校の先生たちとの双方向の率直な議論によって進めたい。大学教育への忌憚のない意見をいただき建設的な議論ができれば」と挨拶しました。

議論においては、泉岡副学長の進行のもと、高等学校教育現場での学力の3要素への取り組み、入試改革の教育現場へ与える影響、アクティブラーニングや英語の4技能化への対応状況等やグローバル英語教育について活発に意見が交わされました。高等学校からの出席者からは、「生徒や職員にとっては、入試対策としての学習と課題解決型の学習は別物という意識がある」「一般入試における英語の外部検定試験のみなし得点は、受験者の負担軽減であり日頃の学習成果が評価されありがたい」といった教育現場の様子が紹介されるなど、貴重な情報共有の場となりました。

高大接続協議会は今後も継続的に実施します。また、来春には関連のシンポジウムも開催する予定です。



協議会の様子

◆ 【いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム】  
茨城の魅力度向上考える学生共同ワークショップ

9月30日（金）、水戸市の本学水戸キャンパスの会議室で、「いばらき地域づくり大学・高専コンソーシアム」の参加校の学生たちが参加したワークショップが開かれました。

「茨城県の魅力度向上」をテーマに開催された今回の学生ワークショップは、同コンソーシアムとしても初めての試みでしたが、本学から2名、茨城県立医療大学から2名、茨城女子短期大学から2名、筑波大学から2名、筑波学院大学から1名、つくば国際大学から2名、常磐大学から2名、流通経済大学から1名の計14名の多様な学生が集まりました。本題に先立ち、本学地方創生推進室の二宮 祐 講師による自己紹介を含めたアイスブレイクが行われ、初対面にも関わらず、和やかな雰囲気の中、意見交換が始まりました。

後半では学生の中から選ばれた司会者を中心に、学生自身による茨城県の魅力度向上に向けた取組についての議論が展開され、終始活発な意見が取り交わされました。

今回の参加者である県内出身で本学工学部4年生の名和田さんは、「他の大学の学生はとても積極的に地域の事をしっかり考えている方ばかりだったので、交流することができてとても有意義でした。皆で少しでも茨城県を変えられるようなアイデアが出せればと思っています」と、意気込みを語りました。

また、学生の意見交換の前に今回の趣旨説明を行った本学の米倉 達広 副学長は、「多様な学生達による活動を通じて、県内の高等教育機関が参加する新たなネットワークの可能性を県内外に示したい」と期待を述べました。

今後は、茨城県の新しい旅行ツアーの提示や広報活動等を通じて、茨城県の魅力度向上に取り組んでいきます。





## ◆ 茨苑会館食堂リニューアルオープンセレモニーを開催

9月30日（金）、茨苑会館（学生会館）食堂のリニューアルオープンを記念したセレモニーが行われました。

今回のリニューアルは、茨苑会館食堂を運営している株式会社坂東太郎と本学及び本学学生とが連携・協力するという画期的な事業です。学生は昨年度の企画段階から「日本一つながる学食プロジェクト」の名のもと、地域の方々にも広く利活用してもらえるような食堂への改修を念頭に、他大学食堂等への訪問調査、学生たちへのアンケートなどを行い検討を重ねてきました。

セレモニーでは、本学の三村 信男 学長および株式会社坂東太郎の青谷 英将 代表取締役社長による挨拶に始まり、プロジェクト参画学生によるプロジェクトの概要・経緯についてのプレゼンテーションの後、株式会社坂東太郎から目録授与、本学から株式会社坂東太郎への感謝状贈呈、プロジェクトで開発された新メニューを含んだ会食などが行われました。

今回の内装については、アンケート調査などをもとにした、「ひとりでも気軽に利用できるようなカウンター席がほしい」「木目調のデザインであたたかい雰囲気を」といった学生たちのアイデアが採用されました。

また、新メニューについては、今回の改修に先行して「夏野菜カレー」などの商品を7月から提供してきました。今後もメニュー開発を継続していきます。さらに現在、市内の農家の方の協力のもと、畑づくりに取り組んでいる学生プロジェクトとの協働も検討しており、今後、地域と連携したさまざまな企画へも展開していく予定です。

リニューアルされた茨苑会館食堂は、10月3日（月）から営業を開始し、さっそく多くの学生・教職員らが利用しています。



窓際のカウンター席



三村学長挨拶



青谷社長挨拶



青谷社長挨拶



プロジェクト参画学生